

# 清水谷古墳調査概要

1987. 3

交野市教育委員会  
(財)交野市体育文化協会

## 序

私たちのまち交野市は、大阪府の東北部に位置し、大阪市、京都市及び奈良市など、それぞれ日本の歴史の中心地として栄えた地域よりほぼ等距離に位置しております。そのため市内には歴史的に重要な数多くの文化財が存在しています。

この歴史的環境に恵まれ、のどかな田園都市の様相をただよわせていた交野市にも近年、近隣の他市の例にもれず開発の波が押し寄せ、宅地造成等に伴う埋蔵文化財発掘調査の必要性が一段と増してまいりました。

今回、ここに報告する遺跡もそのような宅地造成に伴い発掘調査を実施したものです。

調査に際しまして御教示・御指導をいただいた奈良大学の水野教授及び大阪府の技師の方々をはじめ古墳発見よりこれまで保存維持管理のために御協力いただいた中野徳太郎氏に深く感謝の意を表するだいります。

財團法人 交野市体育文化協会

理 事 長 伊 藤 史 朗

交野市の位置図



## 例　　言

1. 本書は、財団法人交野市体育文化協会が交野市教育委員会より委託を受けて実施した「清水谷古墳」の発掘調査報告書である。
2. 古墳は、大阪府交野市東倉治5丁目2195番地に所在する。
3. 発掘調査は、奈良大学の水野正好教授と大阪府教育委員会文化財保護課の玉井功、松岡良憲技師の教示と指導を賜り、財団法人体育文化協会の奥野和夫、山口博志が担当した。
4. 本書の執筆は、前回の調査担当者である片山長三氏の報告書をもとに、奥野和夫と山口博志が、前述の方々の助言を得て作成した。
5. 古墳の調査及び保存に際し、土地所有者の中野徳太郎氏及び開発業者である橋内建設の協力を得た。記して感謝の意を表したい。
6. 調査の参加者は下記のとおりである。

東　　浩　昭・大　中　寿　之・井　川　堅　司  
梶　　寿　成・河　田　淳　一・小　谷　浩　司  
三　原　敬二郎・北　田　茂

# 目 次

## 序

## 例 言

第1章 調査の経緯 ..... 1

第2章 古墳の位置と歴史的環境 ..... 1

第3章 調査の経過 ..... 4

第4章 古 墳 ..... 5

(1) 墳 丘 ..... 5

(2) 周 溝 ..... 5

(3) 内部主体 ..... 8

(4) 遺物の出土状態 ..... 10

(5) 遺 物 ..... 11

第5章 まとめ ..... 12

図 版 ..... 13

## 第1章 調査の経緯

清水谷古墳は昭和42年3月末、当時この土地の所有者であった、中野徳太郎氏がみかんの苗木を植えようとして地面を50cm程掘り下げたところ、古墳の天井石の一部が現われ偶然に発見されたものである。

中野氏の届出によって、当時の交野町教育委員会より連絡を受けた大阪府教育委員会は、元四條畷高校の教諭であった片山長三氏を調査責任者とする地元の発掘調査の経験者数名に依頼して4月13日より3日間の緊急調査を行い、当古墳が古墳時代後期の横穴式古墳であることを確認した。

以後、古墳の部分は、土地所有者である中野氏によって今まで大切に保存されてきたが、昭和62年2月になって、中野氏が当該所有地を処分して、市外へ転居されることになり、そのため、古墳の今後の処置について中野氏より市教育委員会の方へ相談があった。

そこで、同氏と市教委及び土地開発業者との協議の結果、両者の協力により古墳部分を保存することになり、その範囲の確認と合わせて再度、石室内の調査を実施したものである。

## 第2章 古墳の位置と歴史的環境

清水谷古墳は、大阪府交野市東倉治5丁目2195番地に所在する。古墳の所在する交野市は、大阪府の東北部に位置し、市域の東部及び南部は金剛生駒山脈に含まれる。

平野部には、奈良県の生駒市に源を発する天野川が生駒山系をつらぬいて、市域をほぼ二分する形で南から北へ流れ淀川に注いでいる。

市域の標高は、最も高い所で海拔345m、最低で15mとなっており表層地質は生駒山系部分は花崗岩石、山麓部においては一部帶状に大阪層群上部が拡がり、平野部は最も新しい砂質によっておおわれている。

当古墳は、古来より「交野が原」と称する洪積台地の東端、南北に続く金剛生駒山系の枚方市津田山と、交野市倉治山を境とする清水谷から拡がる扇状地の最上流にあたるところ（標高約100m）の北側の尾根筋に當なまれている。



第1図 遺跡分布図

- |         |         |          |         |
|---------|---------|----------|---------|
| 1 清水谷古墳 | 2 神宮寺遺跡 | 3 森遺跡    | 4 寺遺跡   |
| 5 南山遺跡  | 6 倉治東遺跡 | 7 森古墳群   |         |
| 8 車塚古墳群 | 9 寺古墳群  | 10 倉治古墳群 | 11 大谷窯跡 |

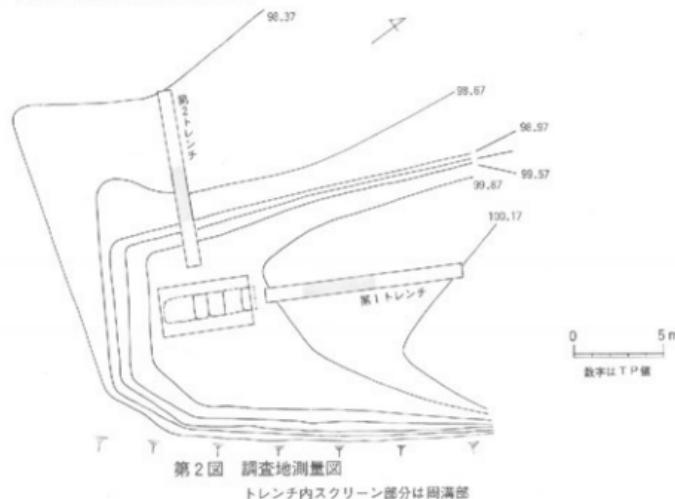
(1 : 20,000)

清水谷古墳の周辺には数多くの遺跡が存在する。当古墳より南へ1.2km程のところには縄文時代早期の遺跡である神宮寺遺跡があり、続く弥生時代の遺跡としては前記の神宮寺遺跡をはじめ、同遺跡からさらに南西へ1.5km程のところに森遺跡が、又そこから東へ山を上った標高200m程のところには高地性集落である寺・南山遺跡があり、その他清水谷古墳付近の大坂府警察学校と関西電力枚方変電所との間の地域にも弥生遺跡が存在する。

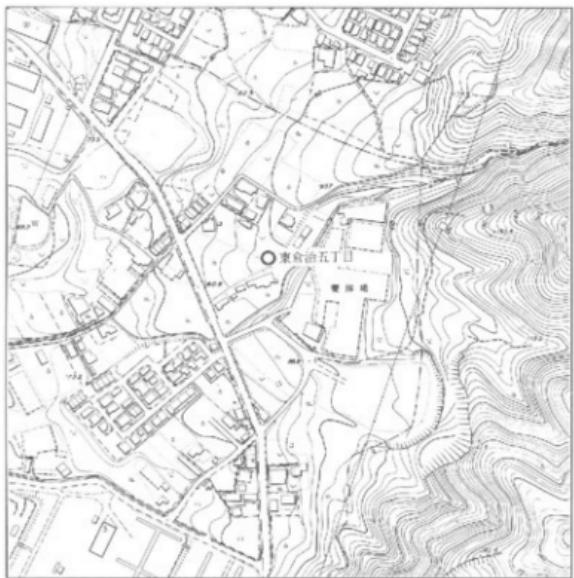
古墳時代における遺跡としては、森遺跡を見おろす尾根筋に全長106mを有し市内では最も古い時期（古墳前期）の前方後円墳である雷塚をはじめとする6基の森古墳群と、これより継起する古墳群として注目される府立交野高校内における車塚古墳群があり、さらに時代が下って清水谷古墳と同時期のものとしては、寺の集落の東側山麓部分に寺古墳群が、又関西電力枚方変電所内及びその周辺には倉治古墳群が存在する。

古墳時代において、この山麓一帯には古代機物業を主とする帰化人が移り住み、その中でも、はたやま（現在の寺付近）、はたもの（現在の倉治の集落より東側）、はただ（清水谷古墳の付近）の三集落が繁栄していた。前記の古墳群は、これらの村の村長（むらおさ）の墳墓と考えられる。

現在、清水谷古墳は一基だけしか発見されていないが、付近には古墳だと言われている所もあり、今後の調査が期待される。



### 第三章 調査の経過



第3図 清水谷古墳調査位置図 (1:5000)

古墳は、倉治山より続く尾根筋のみかん畑の中に所在する。この付近は、これまで幾度となく土砂崩れがあり、そのため古墳全体が完全に土砂で埋もれてしまっていて、今まで全く発見されずにいたものである。

調査は、まず調査敷地内の古墳部分以外の場所に、数カ所のトレーニチを設定し、試掘を実施したが遺構は確認できなかった。(前回の

調査時にも同様な試掘を行ったが遺構等は確認できなかったとのことである。)

調査地内に当古墳以外は存在しないことを確認した後、古墳の範囲確認調査を開始した。

現在、古墳の東側は急斜面で、発掘を実施すると隣地に被害が及ぶ恐れがあること、又、羨道部である西側は隣地であることから、古墳の主体部をおおっている屋根の工作物より少し距離をおいて北側と西側の部分に2本のトレーニチを設定した。

調査の結果として、古墳奥壁より約4m付近、同じく西側壁より約5mのそれぞれトレーニチの最下層部分で周溝と見られる溝を確認した。

周溝の確認作業が完了した後、石室内の実測と古墳主体部付近の地形測量を行って調査を完了した。

## 第四章 古 墳

### (1) 墓丘

当古墳の墓丘は、前述のようにその築造後に山渓から流れ出た砂層におおわれていて全貌を見ることができず、外見から推察することはできない。

墓丘の規模については、円墳と仮定して墳端を周溝部中心とすると、南北径については南側の部分は不明であるが、北側の場合、石室の奥壁より約4.4mで墳端となる。奥壁より1.5m程の石室内部の所を墓丘の中心と仮定すると半径約6mとなり、この数値から推定して12m前後が概ねの墓丘径となる。東西径については、西側の周溝部分と南側の斜面から推定して南北径よりやや短い概ね11m程度であろう。墓丘の高さについては、天井石を覆う墓丘部分の封土がなくなっているため、築造時の正確な高さは不明であるが、基底部から現地表面までの高さが2.8m、同じく基底部より天井石の一番高い部分までが1.97m、現在残っている封土の最も高い所で約2.4mであることから推定して2.5m程度であろう。

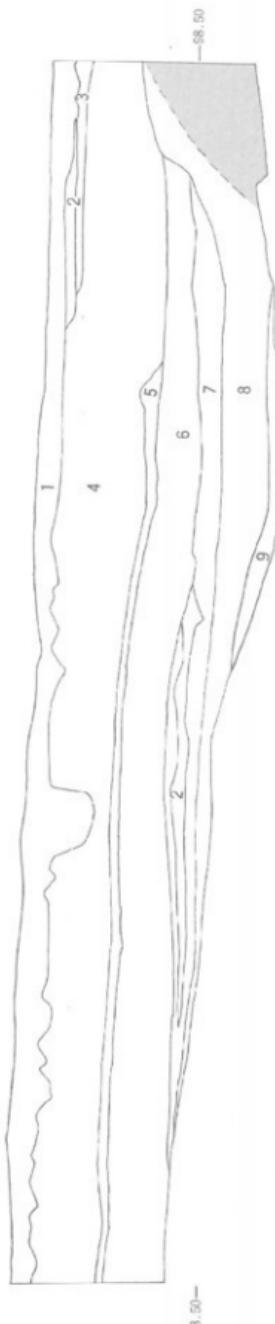
又、周溝底部から墓丘頂上部まで高さは北側で1.8m、西側で2.3mであった。

### (2) 周 溝

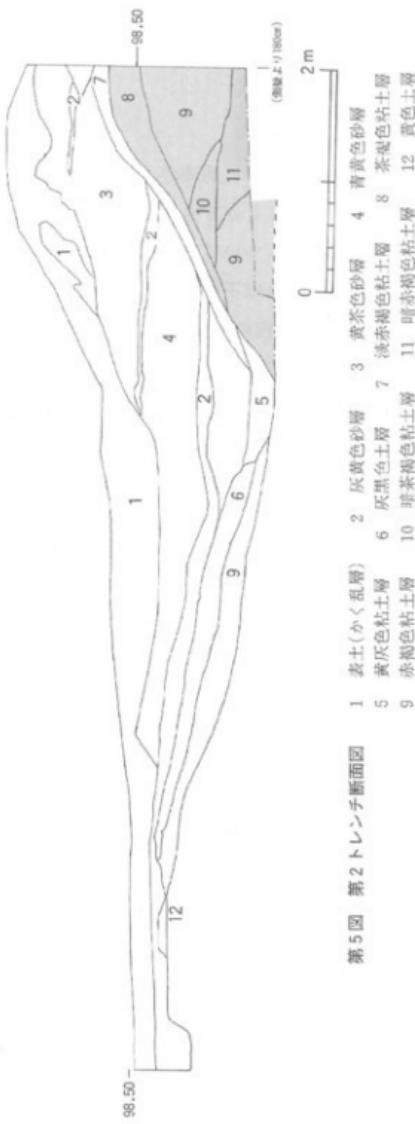
周溝については、今回の調査では全体を把握することはできなかったが、2箇所にトレンチを設定した結果によると次のとおりである。

まず第一トレンチでは、最下層の部分で黒灰色の腐植粘土が堆積した溝を確認した。溝は奥壁より4.4m(溝中央部)の所で認められ、最深部は表土より2.2mを測る。周溝内の最下層堆積土である黒灰色粘土層の上位には、古墳主体部の天井石の上部で確認できる封土と同様の暗赤褐色粘土層があり、この粘土層からは、古墳の封土部分同様に若干の遺物が出土した。

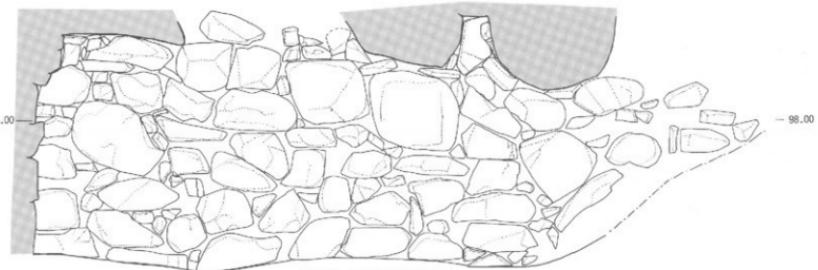
この周溝は、腐食土層の示すとおり築造後しばらくは溝として機能していたが、やがて封土部分から流れ出た(今回の調査では、古墳の封土部分と流出部分との層序は確認できなかった)土によって埋まり、次の堆積層である黄灰色土層(出土遺物を含まない)によって完全に埋まってしまう。そしてその後は、この地域の古くがらの言い伝えに



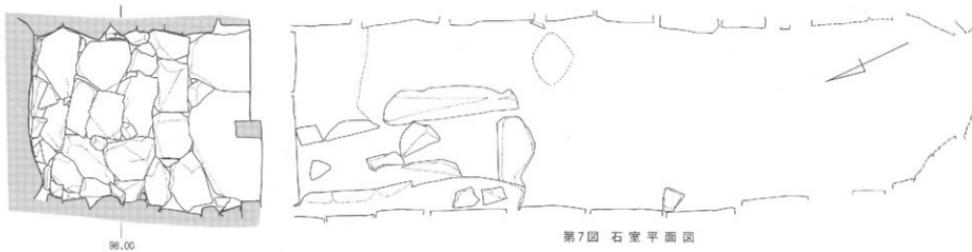
第4図 第1トレンチ断面図  
 1 表土 2 黄白色シルト層 3 黄色砂層 4 黄茶色砂層  
 5 淡茶色シルト層 6 黄白色砂層 7 黄灰色粘土層  
 8 暗赤褐色粘土層 9 黑灰色粘土層  
 (高さ±0.00m)



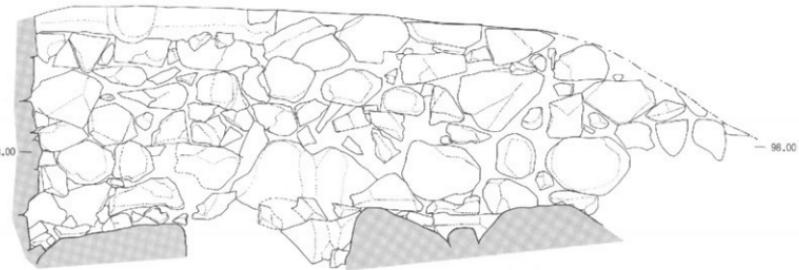
第5図 第2トレンチ断面図  
 1 基土(かく乱層) 2 灰黄色砂層 3 黄茶色砂層 4 青黄色砂層  
 5 黄灰色粘土層 6 灰黑色土層 7 淡赤褐色粘土層 8 茶褐色粘土層  
 9 赤褐色粘土層 10 明茶褐色粘土層 11 暗赤褐色粘土層 12 黄色土層  
 (高さ±0.00m)



第8図 石室東側壁図



第9図 正面奥壁図



第6図 石室西側壁図



もあるように、大規模な山崩れ等による土砂の流出により、やがて墳丘全体が埋まってしまったのであろう。

尚、周溝の外側の肩については、奥壁より約6.7mの地点で幅4~5m程度であろう。

第二トレンチについては、同じく最下層の部分に黄灰色粘土層が堆積した溝を確認した。

この溝についても断面の層序及び位置的にみて周溝であると推定される。最下層の黄灰色粘土層は赤褐色粘土層及び灰黒色土層を削り取った形で堆積しており、中に小石を多量に含むことから急激に流れ出て堆積したものと推察される。

この周溝は、灰黄色粘土層の堆積によりほぼ完全に埋もれ、その後は第一トレンチと同様に墳丘の封土まで完全に埋ってしまう。

同トレンチにおける最深部はTP 97.21mで石室基底部より13cm高く、第一トレンチより52cm低い、又西側壁より4.7mを測る。

周溝の外側の肩部分及び幅については詳しく述べては不明であるが、灰黄色粘土層から推察して肩については西側壁より約7m地点で、幅は約3m程度であろう。

### (3) 内部主体

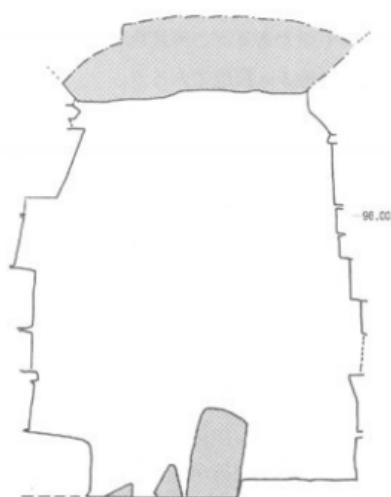
古墳の内部主体については、前回の調査後羨道部の一部をコンクリートで補修しており、現在では発見当時と多少違っているため前回の報告書をもとに考察した。尚、古墳羨道部については、調査地外であるので一部不明である。

古墳の主体部は無袖の横穴式石室であり、内部の上床面は奥壁から入口まで4.6m、幅は奥壁より3mまでの間は1.2mから1.1mで、それから羨道部に向かってしだいに狭まり、奥壁から4mでは約0.9mとなる。当古墳の側壁には明らかに屈曲する袖の部分が認められず玄室部と羨道部の境界は定かではない。しかし、この点について先の報告書の中で片山長三氏は、古墳の立面からみて天井石が奥から三枚目（現在二枚目の天井石はなくなっている）までは、床面からの高さが1.5m程度であるのに対して四枚目からは0.9mとなっており、又、土床面もこれまで水平であったものがこの付近からしだいに上っていることから、北側奥壁より天井石三枚目までの部分が玄室で四枚目からは羨道部だとみておられる。

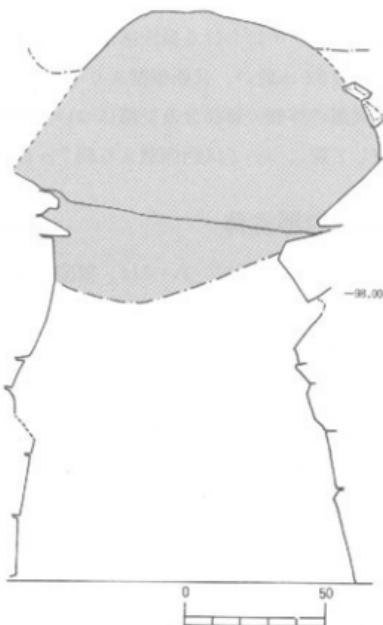
両側壁面は、基底部ではほぼ垂直に積み上げられているが、基底部より40~50cm程

上ると両方からしだいに迫持形に張り出して15~20cm程石室内へ斜め截頭アーチ形となり、その上に天井石を受けている。

遺体を納めるための施設としては、玄室内奥壁面と西側壁に接して箱式石棺がある。玄室の奥壁をそのまま石棺に利用しているため、石棺の北側部分は圓石を欠いている。又、今回の調査においても、棺の蓋石の有無については、玄室内及び古墳周辺ではそれらしきものは認められなかった。

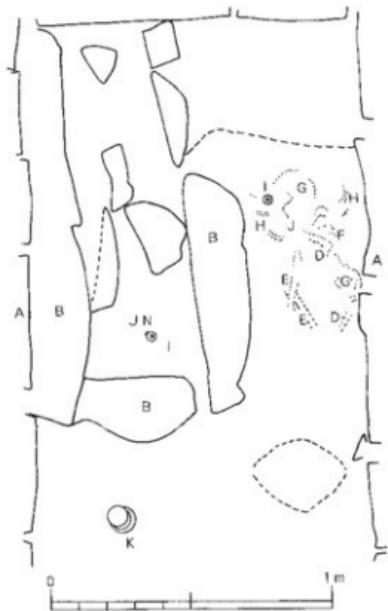


第10図 北側立面図(奥壁に向かって)



第11図 西側立面図(狭道に向かって)

#### (4) 遺物の出土状態



第12図 遺物分布図

- B 箱式石棺 C 骨盤 D 大腿骨 E 脊骨
- F 脊椎骨 G 頭蓋骨 H 肋骨 I 金環
- J 齒 K 土師器

古墳石室内における遺物の出土状態については、石室内的副葬品の大半が持ち去られていて残っているものはきわめて少なかった。

石棺内の遺骨はまったく認められなかつたが、南棺壁から30cm、東棺壁より30cmの所に金環一個、及びそれに付着して緑青層に包まれた歯が一個出土した。

この歯を当時、歯科医の渡瀬透氏に調査を依頼したところによると、この歯は下顎永久歯の切歯で、形態的に見て歯冠部は完成されているが、歯根部の石灰化がまだ不充分であったために根部が消滅したものであろうとの理由により、この歯は9才未満(下顎永久歯の歯根部が完成されるのは日本人では生後約9年後といわれる)の子供のものと推察された。

石棺と東壁の間の南寄りで一部分の人骨があった。

溶解度がはなばなしく細片はすでに消滅

しているが、元軍医であられた中野徳太郎氏の指摘によると骨盤、脊椎骨、肋骨、頭蓋骨、脛骨、大腿骨の一部であることがようやく識別でき、骨盤は東壁に最も近く位置し、左右大腿骨がそれから南西及び北西に拡がるように股を開いた形となり、その膝蓋骨のある付近は消滅しているが、それに接続すべき左右の脛骨は膝骨のある部分からともに西南及び西北に屈められ右脛骨を上にして互いに交差するようにであり、西向きに座ったあぐらの形がようやく観察できる。又脊椎骨はほとんど土塊となっていいるが、そのうち2~3個の連続する方向により上体は大体北々西に崩れていることがわかり、その西側に肋骨らしいもの、骨盤から北北西30cmばかりに頭蓋骨と思われ

るもの一部及び歯数個があるのが確認されるとのことであった。

頭蓋片の西側に金環1個があり、又石棺の南囲石の外に風化した花崗岩があり、その南側に石にくい込むような形で土師器の皿が三枚重ねた形で置かれていた

土師器の皿より30cm、北側隣直下に板状鉄片二個が出土した。

又、玄室内に流れこんでいた砂混りの50cm程度の粘土層を取り除く中から、前述と同時期の弥生式土器片が多数出土した。

## (5) 遺 物

これまでの調査における出土遺物の中で、当古墳の副葬品と認められるのは金環だけであり、高杯の脚部及び土師器皿等については明らかに時期が異っており、その他須恵器甕の体部の小片、桃の実、鹿の骨の一部、鉄滓等については不明である。

### 副葬品

**金環** 中実の銅胎に金箔を張ったもので、①は長径2.65cm、短径2.44cm、断面径0.86cmを測り、重さは18gである。②は1と同様に銅胎に金箔を張ったもので長径2.71cm、短径2.50cm、断面径0.86cmを測り、重さは19gで保存状態については両方とも部分的に鏽が付着しているものの良好である。

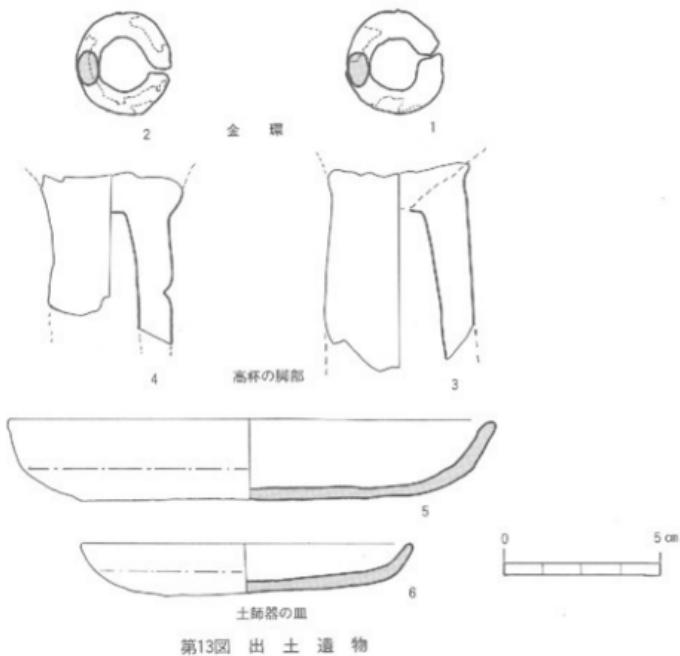
### その他の遺物

**高杯の脚部** 高杯は完形品ではなく脚部の柱状部分のみ二個出土した。弥生後期のものである。

**III 土師器の皿** ⑤は口径12.6cm、器高2.2cmを測り、⑥は口径8.5cm、器高1.3cmで両方とも表面の風化が激しく、内外面共に調整は不明であるが、体部外面にかろうじて指頭の圧痕が認められる。両方とも平安以降にくだる。

(注) ……石室内部については、前回の調査で終了しているため、今回は測量調査にとどめた。

前回の調査結果は「大阪府教育委員会文化財保護課蔵書第4598号」にまとめられており、「遺物の出土状態」については改めて前回の報告にもとづいて説明した。



第13図 出土遺物

## まとめ

清水谷古墳は調査の結果、円墳か方墳かについて結論はでなかったが、仮に円墳であるとした場合、墳丘は東西径約11m、南北径約12mの無袖横穴式石室を内部主体とする古墳である。

石室の規模は羨道入口より奥壁までが約4.5m(現在の確認できる南壁面の積み石の端まで)で、幅は羨道入口付近で約0.9m、奥壁部では1.2mで、天井石までの高さについては、最も高い部分で基底部より1.45m、最も低い部分で0.9mであった。

古墳の築造時期については前回の報告書では7世紀の築造かと推察されるとあるが出土遺物から考慮してもう少し古くなるかもしれない。

尚、古墳の封土の中から弥生時代後期の土器が数多く出土したことについては、他の場所から運搬したものであるとあり、その場所については当古墳より西南へ400m離れた所にある弥生時代後期の遺跡からであろうとあるが、その後の知見によると当古墳の周囲においても弥生時代後期の遺構及び遺物が確認されている。

# 図 版

図版 I



第2トレンチ（西側より）



第1トレンチ（北側より）

図版 II



石室内部(奥部方面に)



奥部入口附近

図版 III

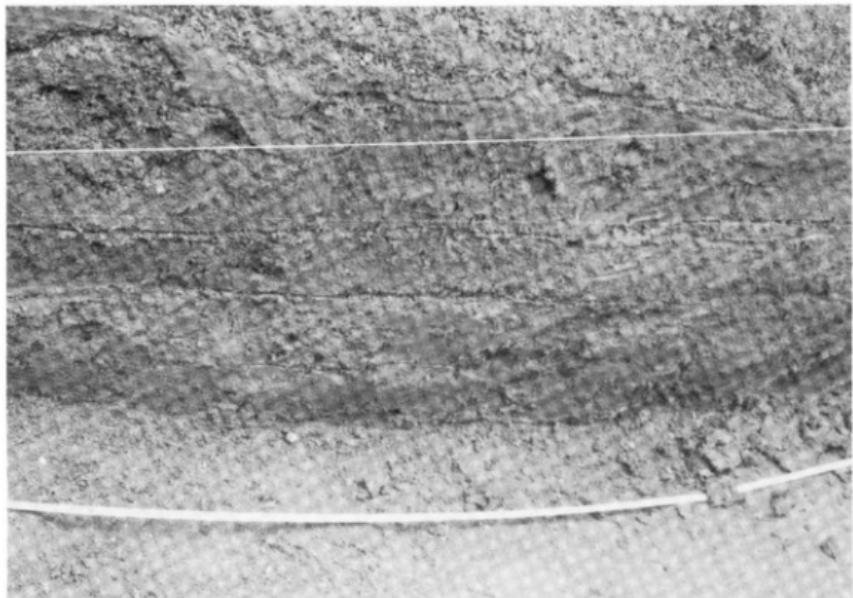


石棺部分

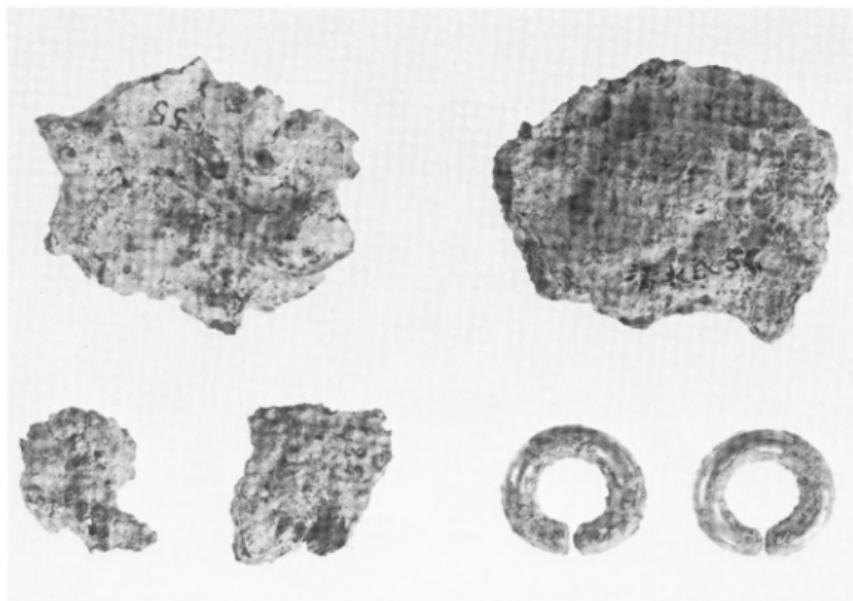


古墳石室内部（奥壁に向かって）

図版 IV

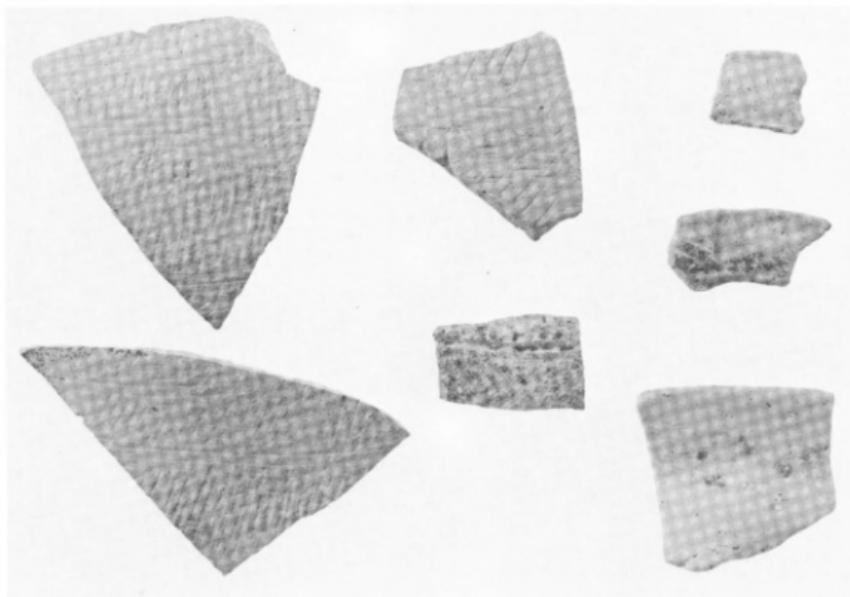


第1 トレンチ（周溝部分）

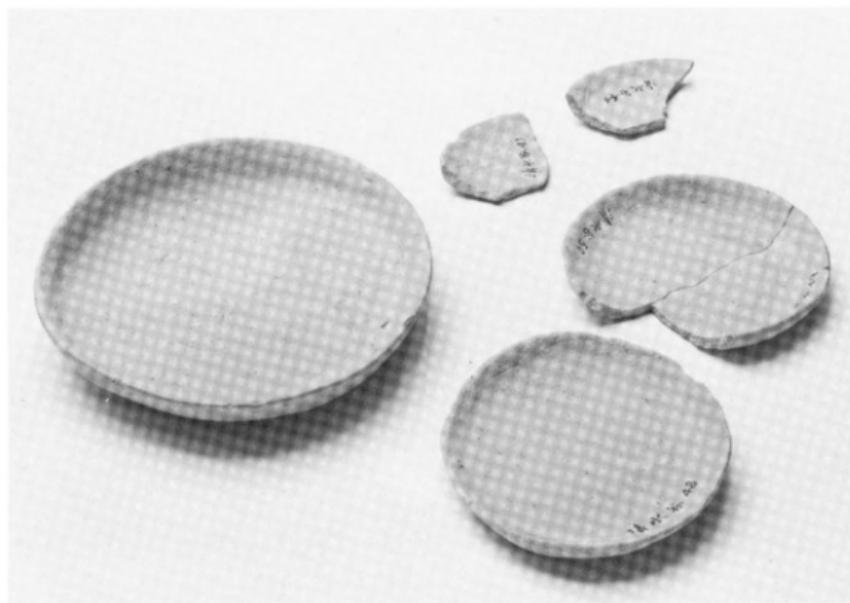


清水谷古墳出土遺物（鉄滓・金環）

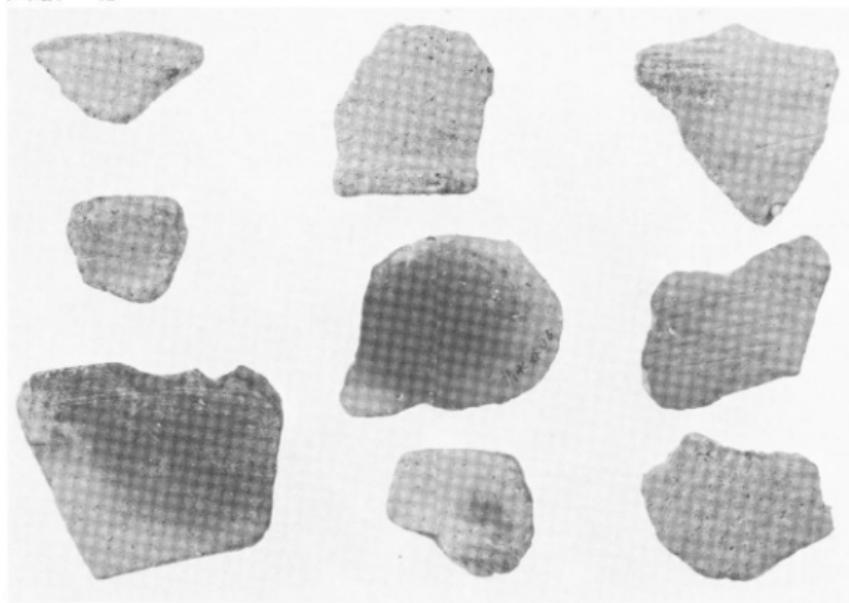
図版 V



清水谷古墳出土遺物 (須恵器・土師皿)



図版 VI



清水谷古墳出土遺物 (弥生土器)

